

平成 27 年 4 月 10 日

2014 奈良県立医科大学
学生災害ボランティアバス 復興支援活動
活動報告書

NARA Will
奈良県立医科大学
学生災害ボランティアグループ

1. 活動の概要

奈良県立医科大学の学生 7 名で平成 27 年 4 月 2 日（木）から 4 月 4 日（土）の間、福島県内でボランティア活動など行った。南相馬市小高区では倒壊した家屋のがれき撤去を、鹿島区では仮設サロンでの傾聴活動などのボランティア活動を行った。また、南相馬市小高区、浪江町などの津波被災地域と原発による警戒区域を視察した。また、福島県立医科大学で放射線災害医療センターの見学、放射線の専門の先生から放射線の話を受講、福島県の県民健康調査についての講話を受け、南相馬市立総合病院の副院長の及川先生より講話を受けた。

今回は福島県に興味はあったがまだ現地を訪れたことのない学生を対象に募集した。「実際に行ってみて被災地に対する意識ががらりと変わった。同じ日本で起きている現状だからこそ、これからも見つめていきたいと思った。」という参加者からの声があり、実際に現地へ赴くことで、福島県や震災について考えるきっかけとなったのではないかと考える。

2. 主な活動

2 日（木）	昼、福島駅集合 放射線災害医療センターの見学、放射線についての講義（福島県立医科大学） 県民健康管理センターの職員の方からの講話（福島県立医科大学）
3 日（金）	南相馬市立総合病院 副院長及川先生による講話 がれき撤去のボランティア活動（南相馬市小高区） 小高消防署での講話
4 日（土）	小高区津波被災地域の視察 仮設サロンでのボランティア活動（南相馬市鹿島区） 昼、仙台空港解散

3. 参加学生

医学科 4 年：國近瑛樹、高田晃司、宮澤宏輔
看護学科 3 年：竹村望、森川愛弓、山田梨加、山本知世

4. 放射線災害医療センターの見学

東日本大震災や福島第一原発事故の教訓を踏まえた福島県立医科大学や附属病院の対応の変遷や放射線の知識についての講義をして頂いた。福島県立医科大学は震災前から放射能対策のされている医療機関であったが、それでもやはり震災前は原発で放射能漏れがおこることを完全に想定してはいなかったという話を聞き、参加学生からは「あれだけ危険なもの近くですら

どこか油断があったのかなと思う。海にも面しておらず、原発もない奈良で常に地震などに完全に備えるのは限界があるので、福島医大放射線災害医療棟での講義
ように生かすか考える必要性を感じた学生もいた。県立
知り、「奈良で災害が起こった時はどうなるのか心配になった。」と話す学生もあり、同



福島医大放射線災害医療棟での講義

じ県立医科大学として奈良での備えと繋げて考えた学生もいた。

5. 南相馬市立総合病院、及川先生のご講話

福島第一原発から 23km の場所にある南相馬市立総合病院（南相馬市原町区）で、同病院副院長の及川友好先生から被災当時の状況と住民目線の福島の現状について講話を受けた。「介護が必要な家族がいるとき、避難指示が出たらどうするか？」という先生の問いかけに対し、その家族を残して逃げるができるのか、避難場所ですらいいのか、それぞれが自分のこととして考えた。「何を優先すべきなのか4年たった今も判断できない。」と話す学生もあり、当時、判断を迫られ非難した方々はどれだけ大変な状況であったのかを改めて感じた。また、原発に関連する法律や政府という視点からも原発について講義を受け、「政府にもすぐには判断できない複雑で今前にならない事態であったのだと改めて原発の恐ろしさを感じた。」と考えた学生もいた。また、放射能の影響で南相馬市総合病院では医療スタッフが3分の1になり、病院を支える他の委託業者がいなくなりそれでも患者さんを見続けたという体験を聞き、「病院からさっていったスタッフも苦渋の決断の中で去っていたのかと思うと自分ならどうしていたかを考えることができなかつた。」とまた、震災の被災者とはだれかという話をしていただいたが、見る側の立ち位置によってかわってくることを感じた。



6. ボランティアセンターでのボランティア活動

南相馬市小高区では個人宅のごみ出しの手伝い、庭に積まれた廃材の撤去や竹の伐採を行った。小高区は計画的避難区域に指定されており、立ち入り時間の制限や持ち出しの禁止によってがれきの撤去が遅れている。「自分たちが行ったことはほんの些細なことで、成果があまり見えないとも感じたが、こういった地道な活動の積み重ねが復興へとつながるのではないかと考えた学生もいた。今回私たちが福島のためにできたことはほんのわずかであるが、これまでそこに携わってきた人が積み重ね、繋いできたバトンを次の人に繋ぐためにも意義のあるものであったのではないかと考える。震災から4年経ち、支援の形としては変化しつつも改めてボランティアの必要性を再認識することができた。



7. 南相馬市尾高区の視察

小高区は福島第一原発の 20km 圏内に位置し、放射性物質の管理規則上、汚染された物品・がれきの持ち出しが制限されていることもあり、復旧が大幅に遅れている地域である。

「もうほとんど報道されていないので、復興は進んでいるものだと思っていたが、一面何もない更地ばかりで衝撃を受けた。」と話す学生もあり、テレビの画面を通してではなく、実際に自分の目で津波の跡地を見ることで、津波の恐ろしさを、身をもって感じる時間がたった。いたるところで除染作業が行われていたり、汚染物質が入った黒い袋が並べられていたりしてまだ安心して住める状態に復興したとまでは言える状況ではない様子であり、「想像していたよりは整理されていたが人が少なくとてもさみしい状態に見えた。」と話す学生もあり、

去年訪れた時にあった建物が取り壊されていたりと、時間の流れを感じたが、新たに作られた建物はなく、復旧までまだまだ時間がかかるという印象を受けた。



8. 仮設サロンでのボランティア活動

南相馬市鹿島区の仮設住宅で行われている仮設サロンに参加した。仮設サロンでは傾聴、マッサージ、出し物を行った。初めて仮設住宅を訪れた学生はその造りを見、生活者からの話を聞いて、

今回参加して下さった方は、非常に明るく、早くこんなことやあんなことをしたいといった風に非常に前向きな方が多かった。ただ、話の中から、仮設住宅の抱える問題もたくさん知ることができた。若者不足や、終わりの見えない仮設暮らし、故郷離れなど、地域に住んでおられる方にとって非常に重大な問題ばかりだった。



私は、最初に一軒一軒のお家をまわり、サロンのチラシを配りました。不在の方や病院に行かれる方々も居ました。最初は、拒否されたらどうしようという不安もありましたが、出てくれた方は皆さん笑顔で話して下さりました。ある女性は、「仮設では何もする事がない。ずっと寝てたけれど、それだったら寝たきりになるのが怖いし、今はテレビを見てるんです。だから、こうゆう行事は嬉しい。」と喜んで下さりました。だからこそサロンは、コミュニティづくりやひきこもりの防止、心理面への影響に重要だと思いました。加えてサロンでは、多くの方々が参加して下さり、自分の故郷の話や震災での出来事について自ら話してくれたことは、驚きでした。また、「畑仕事や旅行が好きだけど震災があっからしていない。でも、仕方ないね。」と話す方も居ました。この言葉は、胸が痛くなりました。今まで趣味にしていたことやその人の生きがいをも、震災は奪ってしまうのだと感じました。1日でも早く、住民の方々が元の生活に戻れるように前進していけば...と心から感じました。

クイズについては、改善すべきところはありますが、司会の方々のスムーズな進行があり、来てくださった方も楽しそうな様子であったので、今後活かして行きたいと感じました。

集会場に飾ってある写真を見て「まだここにいらっしゃるんだ」と愕然としてしまった。しかし、集会場で見せてくださった笑顔を見てうれしかった。ボランティアで行くことで「福島のことを忘れていません」という意思表示をすることが大切なのかなと思った。

仮設サロンに参加するような人はある程度震災のことを乗り越えて現状を受け止めている人が多いのもあるかもしれませんが、想像以上に明るい雰囲気だったのが印象的でした。ただ同じような家が延々と続く仮設住宅の様子は異様でした。

2年前にも仮設サロンへは行かせていただいているがその時よりも住民の皆さんが震災のことに関して口にしていく機会が多いように感じた。気持ち的にも少し整理がついているのだと感じた。震災があっから後の生活の変化などをお聞きすることができた。何人かの方が言っておられたのが今まで百姓をしていたが田んぼがだめになりそれからはすることがなくなり体を動かす機会や生きがいが減ったことで体がしんどくなったということだった。その中で仮設住宅を毎日散歩して少しでも体を動かすようにしていたり、近所の方々とサロンに集まってお話をすることで毎日を過ごしているのだとお聞きした。皆さんのつながりが強く互いの存在が生きがいにつながっていることを感じた。サロンで集まる前に仮設住宅を回らせていただいて集会所でマッサージやクイズ大会を行うことを知らせて回ったが、チャイムを鳴らしても出てこない方が半数以上おられてどういう現状なのか知ることができないのが気がかりだった。サロンへ行ける方はまだ精神的にも比較的健康的な方であると感じた。

「仮設での生活がいかに窮屈なものか分かった。お話するときには笑顔で接してくださ

いましたが、その裏には大きいものを失った苦しみがあるのが感じた。」と感じ、被災した方の気持ちを考えるとことの難しさを感じた。そのような方とどのように接したらいいのかもまた難しい問題ではあるが、「生活している人と同じ目線で一緒に考えるという姿勢が大切ではないか」と考えた学生もいた。

この4日間で私たちが福島のためにできたことはほんのわずかです。

今回は、高学年の参加者が多くかったため、ポリクリや実習でみた病棟の状況と重ねたり、医師・看護師として働く姿と重ね合わせながら考えることができた。